台湾閩南語に残っている日本語語彙

黄迎春、新居田純野（大葉大学)、上原聡（東北大学）

１．はじめに

台湾は 1895 年から 1945 年までの 50 年間､日本によって統治され、その間、日本語普及計画が推進された。そして、日本語との言語接触の結果、日本語からの借用表現は台湾に浸透していった。その後終戦を迎えた台湾における「国語教育政策」は、日本語が中国語（北京語）に入れ替わったが、台湾語に借用語として浸透した日本語語彙はすべて消えたわけではなく、今でも使われているものが少なくない。1947 年に日本語の使用が全面的に禁止されてから､40 年後、1987 年頃から次第に閩南語、日本語、原住民諸語、客家語は長期抑圧から開放されていった。このような背景を持ちながらも、今なお台湾語の中に定着して若い世代にも使用されている日本語もあれば､消えていった日本語もある。

陳（2004:88）の調査によると、台湾語に残っている日本語語彙を日本語からの借用語と知って使用しているのは、40 歳以上で 78%、20 歳代から 40 歳までが 73%、20 歳以下が 57%、という結果が出ている。つまり、台湾語における借用語としての日本語に対して、日本語であるという認識が薄れてきており、若い世代には日本語として意識されずに使用されているという傾向がうかがえる。このことは、このような借用語である日本語語彙は、台湾語の中に定着した日本語語彙であると捉えることが可能である。

では、どのような語彙が定着し、どのような語彙が消えていくのであろうか。本稿では、どのような日本語語彙が日常生活において使用されているかを調査し、定着する語彙と消えていく語彙の実態を考察していく。

２．先行研究

張(1983)は、日本語語彙の使用は、年齢・教養・職業によって異なること意識しながら、内省によって台湾に生き残った日本語分類別リストを 222 語をあげ、四分類している。

A　日本語の漢字を台湾語で発音するもの
B　日本語をそのまま発音するが、アクセントの強弱や語尾に増減があるもの（例：亜鉛/Aen/、油揚げ/a bu lage/、挨拶/Ai sa zu/）
C　日本語での外来語をそのまま発音するもの（例：アイロン、オートバイ、カメラ）
D　語源は明らかに日本語にあるが、偶々中国語にも同じ発音をするか同じ漢字を使うもの

そして、台湾語に入った日本語の語彙の統計をとり、社会生活・教育活動や娯楽という類が最も多かったという結論を出している。

また、村上(1986)は、日本語からの借用語を 114 語集め、三種類に分けた。

A　日本語を音訳して台湾の外来語になったもの（張の B と C）
B　日本語の漢字を閩南語で発音し、現代北京語にも見られるもの
C　日本語の漢字を閩南語で発音し、北京語に見られないもの

村上はさらに、両言語の音韻系統の違いによって台湾語に変容した日本語について、半濁音や最初の音節の清音が有気音化することや長音の脱落および拗音の母音連合などの音韻現象をも指摘した。

陳(2004)では、台湾語に入った日本語からの借用語には日本語と意味･音声音韻･形態において異なる点がみられること、借用語のアクセントは鹿児島方言と一致していることを指摘。また、日本語からの借用語の普及率についてのアンケート調査を実施し、全体的には使用度が高いが、年齢層が下がるにつれて、借用語の使用

が減少し、日本語からの借用語であるという認識も低下しているという結果を得ている。

３．研究方法と調査概要

今回行う報告では、日本語を音訳して台湾の外来語になった 89 語を対象に、年代別に一人一人個別に、それらの語彙を「どのくらい日常生活で使っているか」という使用状況について聞き取りをおこない、その結果を集計したものをもとに考察をおこなった。調査の対象は 60 代以上、50 代、40 代、30 代、それぞれ 5 人（計 20 人）と 20 代 6 人の計 26 人である。

張(1983)の分類Ｂの語彙と村上(1986)の分類 A の語彙（日本語における外来語からの借用語は除く）からの 53 語と、20 代から 80 代までの各年代一人ずつにインタビュー調査をおこなって新たに得た台湾語の会話の中に使用されている日本語語彙 36 語を加えた 89 語である。

調査対象とした語彙は次のとおりである（*のついている語は、張、村上に共通して上げられている語彙である）。

a.張(1983)：

油揚げ、挨拶、赤ちゃん、頭、兄貴、良い、おばさん*、おじさん*、おでん、お化け、大きい、かばん*、看板*、勘定、気持ち*、休憩、黒、玄関、紺、刺身、盛り場、白、仕上げる、寿司、背広*、煎餅、疎開、たたみ、たくさん、沢庵、たんす、小さい、てんぷら、長い、にんじん*、姉さん、兄さん、ばい菌、風呂、漫画、味噌汁、やみ、百合、りんご、わさび*、黒い、(人名)さん

b.村上(1986)：

おばさん*、おじさん*、かばん*、看板*、気持ち*、麒麟、昆布、上等、背広*、にんじん*、人形、包帯、羊羹、わさび*、

c.面接調査（以上の語彙に加えて新たに得た語彙）：

あっさり、相棒、危ない、秋、いす、運ちゃん、おもちゃ、お茶、おいしい、奥さん、おみやげ、応援、着物、牛乳、牛蒡、けちんぼう、桜、さよなら、酒、主人、じゃんけん、先生、そろばん、たこ、大丈夫、ちゃんぽん、ちょっと、とろ、名刺、みかん、めがね、春、馬鹿、風呂敷、予備、(人名)ちゃん

各語彙の使用度を調べるために、インフォーマントに上記 89 語について、次の①～⑤のどれに相当するか質問をした。

① 台湾語での会話の中でよく使う。
② 台湾語での会話の中で時々使う。
③ 自分ではあまり使わないが、人が使っているのを聞いたことがある。意味はわかる。
④ 自分では使わないが、聞いたことがある。意味がはっきりしない。
⑤ 全く使わないし、聞いたことがない。

本調査で得た結果を①4 点、②3 点、③2 点、④1 点、⑤0 点として点数化し、年代別に合計を出して人数で割り、それぞれの年代の使用度平均値を出した。

４．台湾に残る日本語語彙の動態

４．１　調査結果

上述の 89 語について聞き取り調査をおこなった結果、次の語彙の特徴が明らかになった。

(1) すべての年代で、使用度平均値が 3 を超えている語彙（平均値の高い順）：

りんご、刺身、たこ、てんぷら、わさび、看板、寿司、おばさん、おじさん、味噌(汁)、運ちゃん、たたみ、あっさり、名刺、休憩、気持ち、予備

(2) 60 代以上と 20 代の使用度平均値の差が 2 以上の語彙（差の大きい順）：

紺、沢庵、応援、みかん、にんじん、
風呂、油揚げ、たんす、かばん、おでん、
たくさん

(1) のような語彙は、年代を問わずよく使用されている語彙といえる。

４．２　分析・考察

陳(2004:80)で指摘しているように、現存する台湾語における日本語語彙の多くは、意味範囲が縮小していて、なかには原語の意味から派生して原義とずれてしまうものもある。今回面接調査によって新しく加えた語彙のいくつかについてもそれが見られ、その使用状況や使用されている意味をあげておく。

「勘定」: 物事を終わらせる意味に用いる。
「寿司」: 日本料理店に行って食べる時に使う。
「にんじん」: 八百屋さんなどで実物のにんじんを見たときに使う。
「味噌(汁)」: 「味噌」はわかる人が多いが「味噌汁」になるとわからない人がいる。
「悪い」: 単独では使わず、「気持ちが悪い」で使う。
「馬鹿」: 「ばかやろう」で使う。
「けちんぼう」: 「けちんぼう」では使わないが、「けち」で使う。

また、同様に、今回調査を行った台湾語話者の会話の中に用いられる日本語語彙について、これまでの先行研究から、次のような特徴の２つのグループに分類することができる（以下各グループの語彙は五十音順、下線は上記(1)の使用度の高い語であること、斜字体は(2)の世代間格差のある語であることを示す)。

①台湾語があるのに日本語が用いられているもの：
挨拶（招呼)、<u>おばさん</u>(ただし台湾語では親戚関係の人をさす呼称のみ)、<u>おじさん</u>(「おばさん」と同じ)、<u>気持ち</u>（心情)、<u>休憩</u>（休息)、*たんす*(衣厨)、*にんじん*(紅菜頭)、<u>あっさり</u>(豪爽)、*応援*(支持)、さよなら(再会)、酒(酒)、先生(先生)

②台湾語がなくて、北京語よりも日本語が好まれて使われるもの、あるいは、日本独特のもので、外来語として定着しているもの：
<u>刺身</u>、<u>寿司</u>、背広、<u>たたみ</u>、<u>味噌</u>、<u>りんご</u>、<u>わさび</u>、<u>運ちゃん</u>、ごぼう、<u>たこ</u>、ちゃんぽん、<u>てんぷら</u>

①の語彙は、近似あるいは客観的には同一の指示内容を持つ台湾語があるのであるが、それとは意味範囲・文脈状況・背景的意味が微妙に異なって使用されると考えられる。また、①にあげた借用語は上記(1)の「すべての年代で、平均3を超えている語彙」に重なるものと(2)の「60代と 20 代の使用度の差が２以上のもの」が混在している。

前者で、意外とよく使用されているものに呼称がある。台湾語では家族親戚の呼称は細かく分類されている。例えば、おばさんは「母の姉妹、母の兄弟の妻、父の姉妹、叔父の妻」というようにそれぞれ違う呼び方があるが、親戚以外の年配の女性の一般呼称がなく、日本語の「おばさん」が取り入れられたと考えられる。

後者は若い世代では使用されなくなっているということである。年代が高い人たちの日常使用言語は台湾語が中心であるため、北京語はあまり使わない人が多いが、若い世代は、学校教育に北京語が使用されているため、だんだん北京語が日常使用中心言語になってきている。今では、若い世代の人で、台湾語が話せなくなっている人も増えている。これらの点を考え合わせると、台湾語に入っている日本語語彙の使用状況が低くなり、若い世代の語彙から北京語におきかわっていくといえるだろう。

②にあげた借用語は、世代を問わず使われている日本語語彙で、特に日本独特の料理・食べ

物が多い。そして、その食べ物は今の台湾でも台湾人の生活の中に溶け込んでいて、地方でもよく見られるものである。特に日本の料理名は料理自体が日本独特の物であり、北京語で表せるとしてもそれは訳語になってしまう。このような食べ物語彙は、年代にかかわらず日本からの外来語であっても、日常会話で使用されており、これからもずっと使われていく可能性が高いといえるだろう。

その外、本調査の(1)、(2)の結果より、日本語からの借用語の動態をながめると、次のような特徴をあげることができる。

「りんご、たこ、てんぷら、運ちゃん、刺し身、おばさん、おじさん、看板」は世代に関係なくよく使用されており、これらの語彙はほぼ台湾語に定着した語彙といえるだろう。

また、年代が若くなるに従って使用頻度が低くなっているものは、「紺、沢庵、応援、みかん、にんじん、風呂、油揚げ、たんす、かばん、おでん、たくさん」であるが、これらは若い世代ではあまりなじみのないものであったり、使われていても北京語で置き換えられていたりするものである。

このほかにも、60 代以降の使用が多いのに対して、50 代から、その使用頻度が突然下がっているものに、「みかん、やみ、たくさん、いす、お茶、危ない」があった。また、逆に新しく若い世代がよく使う語彙に、最近の台湾では、日本の食べ物関係の番組が多く放映されるということ関連してか、「おいしい」や「大丈夫」、また、誰でも使う「さようなら」があった。

５．おわりに

以上、台湾語に入った日本語からの借用語の使用は年代によって衰退しているものもあったが、年代にかかわらず常に使用されており、台湾語に定着したと思われるいくつかの日本語語彙もみられた。これらの日本語語彙は、食べ物や呼称に用いられるものが多かった。また、この調査から、戦後の一時期日本語の使用を禁じられていたにもかかわらず、現在でもつかわれている借用語が少なくないことも明らかになった。ただし年齢層が下がるにつれ、借用語の使用が少なくなってきているのも実情である。また逆に日本からのテレビや雑誌の影響で若い世代に取り込まれていく日本語語彙もあり、このような現象から日本語からの借用語に変化が見られた。また若い世代は国語として北京語が日常生活において使用されており、台湾語による日常会話に使用されていた日本語語彙が北京語にとってかわられたということも考えられるだろう。

本稿では日本語からの借用語で日本語をそのまま発音する借用語のみを対象とした。このほかにも、台湾語には日本語の外来語が多く取り入れられているが、これらについては今後さらに調査を進めて、検討をおこなっていきたいと考えている。

参考文献

陳麗君(2004)『台湾閩南語における日本語からの借用語』南台應用日語學報 第 4 号

張良澤(1983)「台湾に生き残った日本語」『中国語研究』No.22:1-36

簡月眞　渋谷勝己(編)2003『環太平洋に残存する日本語の諸相(2)－台湾－』本科研本班報告書

佐藤圭司(1997)「《普通語》と《台湾国語》の対照研究」東呉大学文学系修士論文

村上嘉英(1986)「台湾閩南方言中来自日語的外来詞」『天理大学学報』No.148:1-6

沈文良(2001)「台湾語における漢字音の一考察」『天理大学学報』No.198:1-17